

「臨床医のための大腸癌の分子生物学入門」

— Molecular Genetics and Colorectal Neoplasia : A primer for the clinician

Department of Colon and Rectal Surgery, The Cleveland Clinic Foundation

James M. Church, et al 著

東京大学教授・腫瘍外科

武藤徹一郎

東京大学助教授・腫瘍外科

名川 弘一 監訳

獨協医科大学教授

藤 盛 孝 博

大腸癌の多段階発癌関与遺伝子がフォーゲルスタインらによって示され、癌が癌遺伝子と癌抑制遺伝子の異常から生じることが明らかになった。また、遺伝子修復に関与した異常がその発生に絡み、臨床的にはこれらの検索が重複癌のスクリーニングに有効ことがわかってきている。最近の医学の世界で遺伝子を用いた分子病理学的診断や予後との相關に関する研究は日常的であり、これらの情報を日常の診断や治療業務に取り入れている分野もある。消化器でも種々の細菌学的検査やMALTリンパ腫の診断治療あるいは癌の放射線・化学療法感受性、occult lymphnodal metastasis、唾液・胆汁液を用いた癌の診断など枚挙にいとまなしである。この数年の進歩を見てみると、実地医家にとって、消化器癌の遺伝子情報を取り入れた治療もそう遠くないように思える。特に、テロメアーゼ活性の測定が癌の診断や治療に活用される時代などは本当に近いかもしれない。このような時代を背景として、時機よく、世界におけるこの分野のオピニオンリーダーである武藤教授のグループが訳された本である。それだけで名訳本と言って良いであろう。

本書は全部で11章から成り、遺伝子学への招待から将来の展望までで構成され、初歩的な遺伝子構成の基礎で始まり、腫瘍学と遺伝子、大腸癌のスクリーニングと遺伝子、遺

伝性非ポリポーシス性大腸癌、大腸癌登録まで、きめ細やかに作られている。更に、遺伝子検索の手技が原理も含めて丁寧に説明されている。最後に用語解説まで盛り込まれている。この内容を更に充実したものにしているのが、なんと言っても翻訳文がわかりやすいことである。武藤教授、名川助教授のこの本の翻訳に対する意欲が強く感じられる。

監訳者の序を引用する。“かつては臨床医、特に外科医にとって、遺伝子を学ぶことはほとんどなかった。実際の臨床の場で遺伝子に対する知識が使われる必要性がなかったからである。しかし、時代は変わった。遺伝子を含め、分子細胞生物学の知識なくしては病気を語れない時代となった”“このように本書は各章ともホットな話題が盛り込まれ、しかも要点が簡潔に記載されている。臨床医、特にこれから大腸癌を学ぼうとする臨床医に、分子生物学における最低限の知識のまとめとして本書を活用していただければ幸いである。”

まさにこのとおりの目的をもって作成された訳書である。

監訳者の武藤教授が、腺腫・癌相関を世界で普及させ、しかも大腸腫瘍と分子病理学的研究を章分けの時代から、精力的に押し進めてこられたことは周知のことである。名川助教授はじめ他の翻訳者にもその息吹が伝わり、その歴史がこの訳書を

極めて要領を得た内容に仕上げている。イラストの出来も大変わかりやすいのが良い。著者の序にも、“われわれの目的は遺伝子のトピックスを簡単に論じるのでなく、簡潔に論じるところにある。つまり何が重要であるかを見失うことなく容易に理解できるような方向を目指したものである。”とある。

個人的には、単なる翻訳にとどまらず、内容に対するコメント、あるいは、監訳者のグループがリーダーとなって進めてこられた *de novo* 癌と遺伝子異常や潰瘍性大腸炎の癌化などの、少し進んだトピックスについてのコメント、あるいは現状での遺伝子診断の問題点なども注釈として紹介されておればとの思いが残った。しかし原著者が目指したのが簡潔な入門書である点と、この本を読破してから、それぞれの興味のある分野の分子病理学を学んでいただきたいという訳者の思いを考えればそのようなコメントを期待するのは余計な思いとも言える。まずは、この分野のとっ付きの悪さをこの本で解消してから、次のステップに進めるのが望ましい。価格は内容からみて廉価であり、大腸学を目指す臨床医、病理医の多くにぜひ購入願いたいと思う絶好の入門書である。

● B5 頁120 図24 写真19 表11
1998 定価 (本体3,500円 + 税)
〒400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)